

話題

日本画家 手塚雄二さんが
寛永寺天井画を制作中



制作中の天井画と手塚雄二さん。
6m×12mの板上には墨と白土によって描き出された双龍の姿が

現代日本画壇の雄、手塚雄二さんが
東京・上野の名刹、寛永寺の天井画を制作中。
全長12メートルに達する大画面には自身初となる双龍が跳梁する。
来年11月の完成に向け着々と進む制作現場を訪ね、
大一番にかける意気込みなどを聞いた。

寛永寺創建400年を記念
根本中堂天井画で「龍」に挑む

東京・上野の寛永寺といえば、徳川将軍家の菩提寺として知られる名刹。江戸時代には東叡山主を皇室（輪王寺宮）から迎えたことで格式と規模で国内随一の大寺院として権勢を誇ったという。が、幕末の上野戦争で敷地の多くが新政府に接収され、その後も関東大震災、太平洋戦争による被害を受けるなど受難の時代を迎えるも、戦後は新たに霊園を造営するなど開かれたお寺として広く一般に知られるまでになった。そんな歴史的寺院が2025年に創建400年を迎えることを記念し、御本尊を祀る根本中堂天井画を日本画家・手塚雄二さんに依頼。現在、画家と助手3名を加えたチームによる制作が進んでいる。

ところで、そもそも今回の天井画の依頼は今から5年ほど前に遡るのだという。「明治神宮の奉納屏風の仕事を2年は

ど前に根本中堂を修理するということを聞いていました。明治神宮奉納屏風を含めた個展の全ての巡回が終わった直後、寛永寺から創建400年を迎えるのを機に根本中堂の天井画を私にお願いしたいと依頼がありました」
そして画家は2019年9月、正式に依頼を了承。またテーマについては、「浦井正明門主からの条件は何もなく、題材も自由にやって下さいとのことでした。門主との話し合いの中で『龍』を描きましょう」ということになった。

陳容をルーツに
オリジナルな龍図を模索

それからの手塚さんは、天井画のものと異なる小下図の構想を重ねる日々が続いた。そして昨年4月、ようやく小下図が完成。中でもとりわけ拘ったのは、自分にしか成し得ないオリジナルな「龍」。それはまた、

多くの先人たちが遺した天井画に見られる「雲龍図」を意識してのことでもあるのだろう。

「オリジナルで行こうと思ったのは、はじめに根本中堂を見た時です。その大きさにやる気をかき立てられたこと、寛永寺の天井画となると、どこにもない最高のものでなければならぬ。天台宗の本山の『龍』となる。しかも令和の時代に描くわけですから、よく見る雲龍図のように雲とか霧で姿形をごまかすのではなく、江戸の琳派を意識したような装飾性のある強い作品にしようと思いました。とはいえオリジナルとは言っても龍の基本形はあって、それを手本としないわけにはいきません。それが宋元画の陳容の九龍図巻で、横山大観の龍図などの原形にもなっています。私も同様に陳容の龍を参考としながら、日本画としての気品を保ちつつ、躍動感あふれる独自の表現を目指しました。例えば手の爪の形は完全オリジナルで、髭も通常はもっと太いんですが細くしたり、という具合です。また、小下図の段階で躍動する龍が形として正しいか、例えば鱗の動きとかですが、CGを使って専門家に検証してもらったりもしました。龍は架空の生物に違いはありませんが、出来るだけ正統で正確なものをめざしました」

完成した小下図には、もつれあうかのようには跳梁する双龍のダイナミックな姿が画